

# 江嶋為信の学問の一齣としての『太平記』受容

——『脇屋義助卿縁起』の成立——

田 中 尚 子

はじめに

扶<sup>レ</sup>杖<sup>ニ</sup>吟<sup>行</sup>ス<sup>レ</sup>石<sup>徑</sup>幽<sup>ナリ</sup>

崎<sup>軀</sup>タル山<sup>岳</sup>幾<sup>ク</sup>春<sup>秋</sup>

名<sup>將</sup>ノ旧<sup>跡</sup>問<sup>ヘ</sup>ドモ無<sup>シ</sup>對<sup>ル</sup>モ

蕭<sup>颯</sup>タル松<sup>風</sup>土<sup>一</sup>丘

右は今治藩家老を務めた江嶋為信（一六三五一—一六九五）の漢詩である。新田義貞の弟で、自身も『太平記』に登場する脇屋義助（一三〇一—一三四二）の来歴を語った『脇屋義助卿縁起』の末尾に付されたもので、義助の墓を詣でた際、その荒れ果てた様を目にしての嘆きが詠まれている。なぜ為信はこのような詩、そして縁起を作成したのか。確かに『太平記』でも記される通り、義助が亡くなる地は為信のいた今治であるから無関係ではないし、地元には纏わる過去の英雄を称揚する試みは全国各地で行われていたこととは思うが、ただしその際にも作成に関与した個々人の志向は働くはずである。そこで本稿では、同縁起における為信の志向

性を探り、その成果を以て今治（伊予）という地方小国での『太平記』享受、ならびに学問状況の様相の一端を窺うこととしたい。

## 一、今治にとつての江嶋為信とその学問

元禄二（一六八九）年、眼の病により御用人役をはずれた為信は、今治国分寺前に祀られた脇屋義助公墓を整備、玉垣・石燈籠を建て、脇屋義助の伝記を著して奉納したと伝えられる。『脇屋義助卿縁起』はその時奉納された縁起の下書き段階に当たるものとのことで、現在は江嶋文書の括りで愛媛大学図書館に蔵される。このテクストに注目したい理由としては、本縁起が伊予という中央から離れた地での『太平記』享受の様相を知れるテクストである点が大い。近世期の出版ブームの中、『太平記』も版を重ねて広く世に浸透していくが、それと同時に『太平記評判秘伝理尽鈔』（以下『理尽鈔』、元和八（一六二二）年成立か）、『太平記鈔』（慶長十五（一六一〇）年成立刊）、『太平記大全』（万治一（一六五九）年刊）、『太平記綱目』（寛文八（一六六八）年刊）といった評判書や注釈書

など『太平記』派生のテクスト群も数多く生まれ、時に原典以上の影響力を備えたものとして享受されていったことは、今さら改めて説明するまでもないだろう<sup>(3)</sup>。

この、直接・間接の二層で展開される近世期の『太平記』享受の在り方を想定しつつ『脇屋義助卿縁起』を読むに、「天皇雖<sup>レ</sup>嘯<sup>レ</sup>無<sup>レ</sup>益矣、于<sup>レ</sup>茲楠正行家臣恩地左親衛微服潛行<sup>シテ</sup>竊<sup>シテ</sup>奉<sup>テ</sup>天皇<sup>ヲ</sup>以<sup>テ</sup>南山吉野<sup>ヲ</sup>為<sup>ス</sup>皇居<sup>ト</sup>」という一節が目にと留まる。幽閉地の花山院から吉野へと後醍醐が遷る際にその手引きをした者として、楠正行の家臣恩地左新衛が登場してくるのである。おそらく恩地左近を指しているのだろうが、この恩地左近とは、『太平記』にはその名が確認されないにもかかわらず、『理尽鈔』では言及され、のみならず、その名を冠した『恩地左近太郎聞書』まで作成されるなど、近世期の『太平記』享受の中でその存在感が増す人物である。この辺りについては今井正之助氏や加美宏氏などがつとに論じられるところだが、その人物への言及があること<sup>(4)</sup>からしても、本縁起がいわゆる「近世期における『太平記』享受」の範疇にあることは間違いない。

そもそも為信にはこの縁起を書く以前に『太平記』に関連する作品を手がけた経験がある。ここで為信の経歴を簡単に確認しておくに、日向国飢肥藩の出で、明暦元(二六五五)年に郷里を離れ、三都を廻る中で仮名草子『身の鏡』(万治二(二六五九)年刊)と『理非鑑』(寛文四(二六六四)年刊)、軍書『古今軍理問答』(寛文五(二六六五)年刊)と『闕疑兵庫記』(寛文七(二六六七)年刊)を執筆、それらが評価される形で寛文八(二六六八)年三十四歳の時、伊

予国今治藩主松平定房(二六〇四―一六七六)に召し出され、以降、馬廻り役から累進して元禄四(二六九二)年に家老の地位にまで上り詰め、元禄八(二六九五)年に六十一歳で亡くなるまで今治藩に尽くしたという<sup>(6)</sup>。また、「松風軒山水」の号で延宝七(二六七九)年には西山宗因の批点を得た『山水十百韻』を刊行するなど俳諧の領域では仕官後も活躍しており、役人と文芸活動の両面で評価された人物であったと見なすことができる。そして先に挙げた作品の中にこそ『太平記』に纏わる内容が散見されるのであって、つまりは『太平記』に関する相応の知識があつて、それに関連する作品を残していた為信が、二十年近くの歳月を経て再度『太平記』の影響を感じさせる『脇屋義助卿縁起』を作成したことになる。

『太平記』享受の一環として伊予という地方小国においても、このようにテクストが作られていたわけだが、この「地方」という枠組は、中世から近世にかけての学問の様相を把握する上で重視されるべきものと筆者は考えている。「脇屋義助卿縁起」同様、伊予の地で作成された『齒長寺縁起』を例に挙げ、この点について説明しておきたい。愛媛県西予市宇和町に存する天台宗の寺院、齒長寺の由緒を語る同縁起は、後に同寺住持となる叙述が元弘三(一一三三)年、十三歳の時に上洛した体験をはじめ、自らが見聞きした南北朝動乱の様を齒長寺の動向に関連付けて語っており、巻末の記載を信ずれば、至徳三(一一三六)年十一月八日、六十七歳の時に筆録したものとのことである。南北朝の動乱に関する叙述が縁起の大半を占める構成の中で、齒長寺もしくはその

本寺に当たたる法勝寺がいかに後醍醐に助力し、元弘・建武の変を終結させたかが強調され、『太平記』とは異なる。歴史が展開されることになる。<sup>(8)</sup>それこそ『太平記』——特に元弘の変の段階——ではそこまで四国に光が当てられることがないのとは対照的に、齒長寺、そしてその本寺である法勝寺が存在しなければ、後醍醐の復権は叶わなかったとの理解で話を進めていく『齒長寺縁起』は、まさに齒長寺、ひいては伊予の地の権威付けのために作成されたものと言える。つまり、地方においては自らの地に纏わる人物であったり出来事であったりを拠り所として、その地の価値を高め、権威付けを図る試みがなされ、それを以て中央に対する自身の存在意義を確立させていくのである。<sup>(9)</sup>

地域・地方における『太平記』享受、学問事情の投影といった観点からすれば、『脇屋義助卿縁起』も『齒長寺縁起』と軌を一にしたテクストと言えるだろう。もっとも、『脇屋義助卿縁起』では、義助が当地で最期を迎えるという、『太平記』にも記される「事実」を利用することが可能なのであって、この点では『齒長寺縁起』とは大きく異なってくるはずである。その違いがどのように作品に反映されてくるのか検討していきたい。こういった伊予で作成されたテクスト群の分析を積み重ねていくことで、将来的には伊予という地方小国での『太平記』の受容と変容の在り方、さらには学問の有り様の全容把握に繋がるものと確信する。

## 二、『太平記』の抄出としての『脇屋義助卿縁起』

『脇屋義助卿縁起』（以下、『縁起』）とは具体的にはどのような

内容なのか、まずはそれを確認するところから始めたい。そのあらましを七つのパートに分類すれば<sup>(10)</sup>、以下の如くとなる。

①義助の出自、頼朝拳兵から北条氏への流れ、高時の代での世の乱れ（219字）

②新田拳兵、鎌倉攻撃、北条氏の滅亡（331字）

③足利謀叛、箱根・竹下の戦い、新田軍京への撤退（241字）

④後醍醐比叡山臨幸、足利九州落からの再度の侵攻、正成湊川の戦いで敗死、後醍醐花山院に幽閉さる（238字）

⑤後醍醐吉野へ、新田北国平定へ向かうも義貞敗死、義助善戦するも堪えきれず吉野へ（168字）

⑥義助忠義を認められ昇進、伊予からの要請を受け今治へ、威勢を振るうも病死（203字、内割注10字）

⑦為信、義助の墓を訪れ、その荒れた様を嘆き、漢詩を作成する（115字）

愛媛大学図書館の解説でも『太平記』から知識を得て作成されたとしているが、確かに①～⑥までの大筋は『太平記』と重なる。とはいえ、『太平記』冒頭から巻二十二にまで及ぶ内容をわずかに八十二行に収めるからには抄出とせざるを得ないのであって、それに際しては、当然のことながら義助、そしてその一族にとつてマイナスのイメージとなる内容を削除、もしくは簡略化という方法が取られる。

たとえば②での新田が鎌倉まで侵攻していく過程である。『縁起』では新田に加勢する者が増えていく様を「其、忠肝義膽衆皆感心<sup>ス</sup>、不<sup>レ</sup>移<sup>レ</sup>時<sup>ヲ</sup>發<sup>ス</sup>兵<sup>ヲ</sup>、僅<sup>ニ</sup>百五十騎<sup>ニ</sup>向<sup>テ</sup>鎌倉<sup>ニ</sup>揚<sup>レ</sup>鞭<sup>ヲ</sup>也、八刃<sup>ヲ</sup>

之士不<sub>レ</sub>招<sub>ル</sub>集<sub>リ</sub>不<sub>レ</sub>告<sub>テ</sub>来<sub>レ</sub>、其<sub>レ</sub>勢<sub>ヒ</sub>如<sub>レ</sub>竜ノ如<sub>レ</sub>虎ノ如<sub>レ</sub>熊ノ如<sub>レ</sub>熊ノ」と記し、新田の動きを知つて慌てた北条高時が弟の惠性を派遣、分倍河原と関戸の合戦を経て惠性が敗走するという流れとなつてゐる（高時周章を以テ舍弟惠性を爲大將軍、文ニテ分倍・関戸ニ挑戦ス、血流レ波<sub>レ</sub>道、新田・脇屋多斬<sub>テ</sub>其渠魁<sub>ニ</sub>大<sub>ニ</sub>窘<sub>レ</sub>之、惠性失<sub>レ</sub>防禦ノ術<sub>ヲ</sub>逃<sub>レ</sub>亡<sub>ス</sub>矣）。確かにこの直後に、「然<sub>レ</sub>トモ鎌倉・金湯堅<sub>テ</sub>甲利兵容易<sub>ニ</sub>不<sub>レ</sub>敗<sub>ズ</sub>」という文言も添えられていて、鎌倉側の粘りの前では新田側も容易には勝てず鎌倉までの道は平坦ではなかつたとの文脈は一応読み取れる。しかし、「鎌倉勢先究竟ノ射手三千人ヲ勝テ面ニ進メ、雨ノ降如散々ニ射サセケル間、源氏射タラレテ駈エズ。（中略）義貞遂ニ打負テ堀金ヲ指テ引退ク。其勢若干被<sub>レ</sub>討痛手ヲ負者数ヲ不知」（卷十「新田義貞謀叛事付天狗催越後勢事」と、分倍河原で惨敗したことを明記する『太平記』の如き表現は出てこない。③④⑤で取り上げられる各合戦においても同様の処理がなされていて、やはりこれは『太平記』で記された新田の敗戦や不利な叙述は、義助を主人公とした『縁起』においては好ましくないかと判断されたが故に違いない。

合戦場面のみならず、⑥内の昇進記事においても同様の志向が働く。『太平記』では「此五六年が間ノ北征ノ忠功、異他由ヲ感<sub>ジ</sub>被<sub>レ</sub>仰テ、更ニ敗北ノ無念ナル事ヲバ不<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>仰出、其命無<sub>レ</sub>恙シテ今此ニ来<sub>レ</sub>ル事、君臣水魚ノ忠徳再可<sub>レ</sub>露故也」（卷二十二「義助被<sub>レ</sub>参<sub>レ</sub>野事并降<sub>レ</sub>資<sub>レ</sub>卿物語」と、後村上が北国での新田の戦いを敗北と見なしして無念の思いを抱いているのだが、『縁起』では「主上召<sub>シ</sub>義助<sub>ヲ</sub>、感<sub>シ</sub>多年ノ忠烈<sub>ヲ</sub>無<sub>レ</sub>北征無<sub>レ</sub>功<sub>ノ</sub>之勅<sub>ヲ</sub>、且進<sub>ニ</sub>官位

一級<sub>ニ</sub>」として、後村上が新田を批判していない。新田、中でも義助の忠義を前面に押し出し、失敗や敗戦には蓋をして、彼ら一族のイメージアップを狙つた改変がなされるのである。

逆に『太平記』の表現を踏襲した場面も見ておこう。⑥内の一節を引用する。

而<sub>シテ</sub>後<sub>ニ</sub>義助蒙<sub>テ</sub>勅<sub>ヲ</sub>趣<sub>ニ</sub>南海<sub>ニ</sub>、從兵五百余騎到<sub>テ</sub>豫<sub>忍</sub>今治<sub>ニ</sub>、浦<sub>ニ</sub>、河野<sub>・</sub>得能<sub>・</sub>土肥<sub>・</sub>高市<sub>・</sub>日吉<sub>・</sub>土居<sub>・</sub>河田以下来<sub>テ</sub>慰<sub>ム</sub>問<sub>シ</sub>多<sub>ク</sub>日<sub>ノ</sub>積<sub>鬱</sub>、則<sub>チ</sub>橋<sub>ヲ</sub>居<sub>シテ</sub>于<sub>テ</sub>國<sub>分</sub>寺<sub>ニ</sub>以<sub>テ</sub>振<sub>旅</sub>ス、雖<sub>モ</sub>秘<sub>レ</sub>之<sub>ヲ</sub>蔵<sub>レ</sub>之<sub>ヲ</sub>、威<sub>風</sub>凜<sub>々</sub>テ以<sub>テ</sub>奮<sub>ニ</sub>敵<sub>境</sub>ニ、仁雲<sub>帯</sub>々<sub>々</sub>以<sub>テ</sub>覆<sub>ニ</sub>國<sub>ニ</sub>、凶徒<sub>恐</sub>怖<sub>シテ</sub>未<sub>レ</sub>戰<sub>シ</sub>没<sub>落</sub>十二<sub>壘</sub>、官軍<sub>得</sub>レ<sub>テ</sub>力<sub>ヲ</sub>如<sub>シ</sub>虎<sub>ノ</sub>靠<sub>レ</sub>山<sub>ニ</sub>似<sub>テ</sub>竜<sub>ノ</sub>得<sub>レ</sub>ル<sub>ニ</sub>水<sub>ヲ</sub>、

今治に到着した義助のもとに四国の勢が集まり、その勢が増していく様が描かれる。続けてこれに対応する『太平記』を引用する。

四月十二日伊予国今治浦ニ送<sub>テ</sub>著<sub>奉</sub>ル。（中略）土居<sub>・</sub>得能<sub>・</sub>土肥<sub>・</sub>河田<sub>・</sub>武市<sub>・</sub>日吉<sub>ノ</sub>者<sub>共</sub>、多年ノ官<sub>方</sub>ニシテ、讃岐ノ敵<sub>ヲ</sub>支<sub>ヘ</sub>、西ハ土佐ノ畑<sub>ヲ</sub>塚<sub>ヲ</sub>居<sub>タリ</sub>ケレバ、大将<sub>下</sub>向<sub>ニ</sub>ニ<sub>弥</sub>勢<sub>ヒ</sub>ヲ得<sub>テ</sub>、龍<sub>ノ</sub>水<sub>ヲ</sub>得<sub>テ</sub>、虎<sub>ノ</sub>山<sub>ニ</sub>靠<sub>ガ</sub>如<sub>シ</sub>。其<sub>レ</sub>威<sub>漸</sub>近<sub>國</sub>ニ振<sub>ヒ</sub>シカバ、四<sub>國</sub>ハ不<sub>レ</sub>及<sub>シ</sub>申、備<sub>前</sub>・備<sub>後</sub>・安芸<sub>・</sub>周防<sub>・</sub>乃至<sub>九</sub>國<sub>ノ</sub>方<sub>マ</sub>デモ、又<sub>大</sub>事<sub>出</sub>来<sub>ヌ</sub>ト云<sub>ハ</sub>又<sub>者</sub>コソ無<sub>リ</sub>ケレ。サレバ<sub>当</sub>國<sub>ノ</sub>内<sub>ニ</sub>モ、将<sub>軍</sub>方<sub>ノ</sub>城<sub>僅</sub>二十<sub>余</sub>箇<sub>所</sub>有<sub>ケル</sub>モ、未<sub>レ</sub>敵<sub>モ</sub>向<sub>ハ</sub>又<sub>先</sub>ニ皆<sub>聞</sub>落<sub>シ</sub>テ<sub>ン</sub>ゲレバ、今<sub>ハ</sub>四<sub>國</sub>悉<sub>一</sub>統<sub>シ</sub>テ、何<sub>事</sub>カ可<sub>レ</sub>ト憑<sub>敷</sub>思<sub>ア</sub>ヘリ。（卷二十二「義助予州下向事」）

確かに一字一句重なるわけではなく、義助の元に集まる四国の

氏族名(破線部)などにも若干の異同が見られる。が、注目したいのは傍線部である。日本古典文学大系頭注では当該箇所を「力量のある者が機会を得ていよいよその力をあらわすとえ」と説明し、出典として『塩鉄論』『刺復』と『孟子』『尽心下』を挙げているが、この譬えが——虎と竜の順が逆にはなるもの——『縁起』にも見えるのである。偶然の一致とするよりも『太平記』を参考した結果と捉えるのが妥当であろう。このくだりは今治に直接関係する内容で、それこそこの直後に義助は亡くなる。四国をそこまで意識しているとも思えない『太平記』にあつて、この部分に限っては義助と伊予が話題の中心なのだから、できる限り『太平記』の表現をそのまま利用するといった方法が採られたと解せよう。

本縁起における『太平記』享受の在り方を確認したところで、次の問題へと話を進めたい。それが本縁起内で複数箇所確認される漢籍引用の問題であり、これこそが『縁起』の志向を明らかにしていく上で重視しておくべき点となる。そもそも『太平記』自体が漢籍を大量に取り込んでいるのだから、それをそのまま利用することもできたはずで、本節で引用した箇所はまさにそれを証明している。しかし、この事例はある意味例外的であつて、為信は本縁起に中国故事を持ち込むにあたっては、基本的には『太平記』をそのまま利用するよりも、その文脈に見合ったものを自ら選んでいったようなのである。為信が漢籍に強い関心を持っていたのは間違いない、だからこそ愛媛大学図書館の解説でも「儒教の引用や兵法の知識も所々に見られ、為信をとおして、江戸時代の

武士がどのようなことを学んでいたかを知ることができる資料」としている。ただし「所々に見られ」る儒教や兵法が具体的には何を指すのか、そしてどこに使われているのが詳らかにされていない現状は看過し難く、可能な限り出典を洗い出していくことは本縁起の志向性を明らかにする上でも欠かせない。よつて次節からは本縁起に用いられた中国故事の出典検討を行う。

### 三、専諸・曹沫故事が意味するもの

漢籍引用からは、作者自身の漢籍に関する知識や関心の深さ、つまりは学問レヴェルを測ることができる。実際、本縁起に引用された漢籍からは為信の学問志向が窺える。まずは、多少の犠牲を出しつつも義貞・義助の働きで鎌倉制圧を成し遂げた新田勢の動きを「義貞・義助、運陣平・張良<sup>謀</sup>、顯<sup>専諸</sup>・曹沫<sup>勇</sup>、雖<sup>虎</sup>・虎<sup>賁</sup>多<sup>死</sup>、終<sup>拔</sup>・鎌倉<sup>ヲ</sup>」と表現するくだり(②内)を取り上げた。陣平・張良といえ、ともに劉邦配下の智将として名高く、軍記でもその名が持ち出されることは少なくない。『太平記』でもまさにこの鎌倉攻防戦の際、長崎田喜が孫の高重の武勇を称えるべく、「汝今万死ヲ出テ一生二遇、堅<sup>ヲ</sup>・摧<sup>キ</sup>ケル<sup>振舞</sup>、陣平・張良<sup>ガ</sup>為<sup>難</sup>・処<sup>ヲ</sup>究<sup>メ</sup>得<sup>タリ</sup>」(卷十三浦大多和合戦意見事)と二人の名を口にして<sup>(14)</sup>いる。

軍記での定型表現とも言うべき陣平・張良の利用はひとまず措き、続く二人、専諸・曹沫に目を移そう。というのも、この二人の登場こそが本縁起における漢籍引用の在り方を考える上で鍵となるのである。専諸とは春秋時代の呉の公子光(後の呉王闔閭)

の側近で、呉王僚の暗殺を実行した刺客、曹沫とは同じく春秋時代に魯の莊公に仕え、斉の桓公に奪った魯の領地を返すよう脅迫して承諾させた逸話が有名な將軍であり、ともに『史記』巻八十六刺客列伝で取り上げられる。王のために死をも恐れず行動するところが鎌倉攻防戦に挑む新田の姿に通ずるとの判断がなされたのかもしれないが、こういった武勇の準えとして機能する武将は他にいくらでも適任者がいるようにも思われ、それこそ『史記』の刺客列伝でも曹沫・專諸・予讓・聶政・荊軻の五人が取り上げられており、そこからなぜこの二人を選択し、しかも並びを逆転させるのかという疑問が湧く。

『太平記』との関わりを考えるとその疑問はさらに強まるのであつて、『太平記』が他の軍記に比して圧倒的な量の漢籍を引用していることは周知の事実だが、その『太平記』でも專諸・曹沫の組み合わせはなく、それどころか專諸が持ち出されるのは全体を通して一例のみ、曹沫に至っては確認できないのである。專諸の名が持ち出されるのは、敵に怯むことなく戦い続けた菊池武時が最後には討ち死にすることを受けての話者評「卷十一「筑紫合戦事」で、「專諸・荊卿ガ心ハ恩ノ為ニ仕ハレ、侯生・豫子ガ命ハ義ニ依テ輕シトモ、是等ヲヤ可申」とある。尚、「荊卿」とは荊軻のことで、彼も『史記』刺客列伝で取り上げられている。『太平記』のこの部分では、死をも恐れず戦う人物として專諸を引き合いに出しているのだから、『縁起』での專諸のイメージとも重なるものの、ではなぜ『太平記』に倣つてもう一人を荊軻としなかったのか、曹沫との組み合わせにする理由は何なのか、という

疑問は解消されない。

ちなみに『太平記』に登場しない曹沫の名は、『源平盛衰記』に見出せる。こちらでも僅か一回のみの登場だが、それが卷二十一「兵衛佐殿隠臥木」の一節である。

兵衛佐重テ宣ケルハ、「軍ノ習或ハ敵ヲ落シ或ハ敵ニ落サル、是定レル事也。一度軍ヲ敵ニ被レ敗、永ク命ヲ失フ道ヤハアル。爰ニ集居テ敵ニアナヅラレテ命ヲ失ハン事、愚ナルニ非ヤ。昔范蠡不<sub>レ</sub>佞<sub>ニ</sub>会稽之恥、畢復<sub>ニ</sub>勾踐之讐<sub>ニ</sub>。曹沫不<sub>レ</sub>死<sub>ニ</sub>三敗之辱、已<sub>レ</sub>報<sub>ニ</sub>魯國之羞<sub>ニ</sub>。爰ヲ遁出テ大事ヲ成立タラシコソ兵法ニハ叶フベケレ。イカニモ多勢ニテハ不<sub>レ</sub>可<sub>ニ</sub>遁得<sub>ニ</sub>。各心ニ任テ落ベシ。頼朝山ヲ出テ安房・上総へ越ヌト聞エバ、其時急尋來給ベキ」ト言ヲ尽テ宣ヘバ、理遁難シテ、各思々ニゾ落行ケル。

戦いに敗れ屈辱を受けながらもそれを耐え忍び、後に報復を叶えた先例として、范蠡・勾踐の「会稽之恥」と曹沫の「三敗之辱」とを対にして引くが、これを持ち出すことで、家臣たちに向けて再起を約束する頼朝の発言に説得力が増すこととなり、この発言を信じた家臣たちは分散してその場から逃げ、後の再結集、勝利を実現させるのである。曹沫のイメージが、負けてもいずれば勝利するといった『源平盛衰記』に描かれたようなものだったとすれば、鎌倉制圧の過程での新田敗北の叙述の簡略化を図りつつも、その敗北のイメージを暗に伝えんとして当該人物を譬えに選択したといった読みができるのかもしれない。併せて、『理尽鈔』では「新田義貞謀叛事付天狗越後勢催事」のくだりで、『源平盛

衰記』に見られる、梶原景時が石橋山で頼朝を助けた話を載せており、その辺りから着想を得た可能性も否定できない。しかし、こういった面を認めつつも、ここでは為信の漢籍の素養の高さにこそ注目しておきたい。というのも、この專諸・曹沫が対となって登場する漢籍が存在するのである。それが『孫子』九地篇である。

其兵不<sub>レ</sub>修而戒、不<sub>レ</sub>求而得、不<sub>レ</sub>約而親、不<sub>レ</sub>令而信、禁<sub>レ</sub>祥去<sub>レ</sub>疑、至<sub>レ</sub>死無<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>之、吾士無<sub>レ</sub>餘財、非<sub>レ</sub>惡<sub>レ</sub>貨也、無<sub>レ</sub>餘命、非<sub>レ</sub>惡<sub>レ</sub>壽也、令<sub>レ</sub>發之日、士卒坐者涕<sub>レ</sub>霑<sub>レ</sub>襟、偃臥者涕<sub>レ</sub>交<sub>レ</sub>頤、投<sub>レ</sub>之無<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>往者、諸<sub>レ</sub>劇<sub>レ</sub>之勇也、

將軍が抑圧しない、迷信を禁じる、余分な財貨を焼き捨てるなどといった具体的な方策を以て兵士たちを戦うより他ない環境に置くと、みな專諸・曹沫のように勇敢な兵士となるとの主張である。この「曹劇」が曹沫の別称に当たるため、ここに專諸・曹沫の組み合わせが成立する。專諸・曹沫を他に行き場のない状況に追い込まれた兵だとする『孫子』の理解は——もちろん『史記』などのような、王のために己の命を顧みずに戦う忠臣というイメージもそこには重ねられているのではあるが——、まさに過酷な鎌倉制圧を命ぜられた新田の状況を表現する譬えとしては最適だったのではなからうか。

ちなみに、曹沫(劇)に関して、諸テクスト間でその人物像が変容するとの太田麻衣子氏の指摘がある。すなわち、戦国期にはすでに賢人としての曹沫像が成立しており(『第一段階』)、戦国末期には悪評を受ける像(『第二段階』)、さらに前漢前期から中期

にかけては敗軍の将でありながら賞賛される刺客の像が形成される(『第三段階』)とのことである。氏の分類では『史記』・『孫子』ともに第三段階に区分されることになるが、いずれにせよ、このように中国では数多くのテクストで曹沫の様々な側面が取り上げられ、これらを通じて広く知られる存在となっていたということである。他方、日本では軍記などを見る限りではほとんど取り上げられずにいたようであり、その中であつて為信がこの二人に言及したというのは、『太平記』そのままではないものを書くことへの思いがあり、そしてそれを可能にするだけの漢籍に対する知識を彼が備えていたという捉え方をすべきであろう。事実、本縁起にはこの他にも『太平記』がその場面で利用してはいない中国故事を用いる箇所が確認できるのである。

#### 四、漢籍引用に見える為信の趣向

『太平記』を参照して『縁起』を作成したのであれば、中国故事も『太平記』からそのまま引くことはできたはずである。にもかかわらず、為信は『太平記』とは異なる中国故事を取り込んでいく。そこには為信の拘りがあり、しかもそれを可能にするだけの知識が彼に備わっていたということである。こうして取り込まれた中国故事の基本は、愛媛大学図書館の解説の通り、儒教や兵法にあったことは間違いないさそうである。

たとえば③内において箱根・竹下での足利の陣を突破した新田の戦いぶりを「所謂名山<sub>ノ</sub>大塞<sub>ノ</sub>十夫<sub>ヲ</sub>所<sub>レ</sub>守<sub>ル</sub>千夫<sub>モ</sub>不<sub>レ</sub>過<sub>ス</sub>是<sub>ナリ</sub>也」<sub>ト</sub>するくだりである。「所謂」の語が添えられるように、直前の



葉の連関性を楽しむという思いがあったとの見方をした方がいいように思われる。

この、連鎖や連関性を楽しむ思いという観点から、②内の「僅二百五十騎向鎌倉揚鞭也、八刃之士不招集り不告来、其勢、如竜、如虎、如熊、如羆」も見ておきたい。新田の拳兵に呼応して東八ヶ国の兵が大挙して集まってきたその様子を、動物たちの力、勢いに準えるのだが、この表現は第二節で取り上げた⑥内の「官軍得力如虎、靠山似竜、得水」との類似性を感じさせる。しかし、『太平記』を踏まえたそちらの表現とは異なり、②内の表現は『太平記』には確認できず、為信自身の発想に拠るものと考えられる。そしてその際、やはり漢籍を参看したようで、『書経』牧誓に、「尚桓桓如虎、如貔、如熊、如羆、于商郊、弗迓克奔、以役西土、勛哉夫子」と、似通った表現が見える。確かに「竜」と「貔」（虎・豹に似た猛獣）との違いがあり、完全に一致するわけではないが、「貔」は「貔貅」と記すと中国古代の伝説上の猛獣を表すことになるらしく、その属性はある意味竜にも通ずる。ちなみにこの部分は、武王の商討伐の際、戦いに臨む兵士に向けてかけられた言葉だというから、鎌倉制圧戦中で使用する譬えとしても整合性は取れているよう。何より動物に譬えるという非常に似た形式でありながら、片や『太平記』の表現を利用、片や漢籍から引用という二パターンが成立しているのも、為信が漢籍にも『太平記』にも造詣が深かったからこそなし得たことと言える。

ともかくもこのように、すべて『太平記』に頼るのではなく、

兵法を軸にそれと連環する中国故事を自ら複数取り込みつつ、当該縁起を作り上げていく為信の姿勢が確認できるのである。そこに為信の漢籍に対する知識の高さが認められるのはもちろん、何かそういった繋がり、発想の連鎖を楽しんでいるかのような為信の姿が浮かび上がるのは、もはや気のせいだとして捨て置けまい。『縁起』においては義助ひいてはその一族の忠義、その活躍を、『太平記』を利用しつつ語ることが主たる目的だったのは間違いない。しかし、その裏にはいかにその語りの中で自身の学識を——そこまで前面に押し出すわけではないもの——披露するのといった点での工夫があった。そこに為信なりの『太平記』享受の在り方が成立したということである。さわめて当たり前な結論ではあるが、しかし、彼の先行作品、ならびに彼の生き様に照らし合わせていくに、本縁起がなぜこのような方向性でまとめられたのか、この点をもう少し明確にできるかと思う。最後にこの問題について触れておきたい。

## 五、先行作品との関係性

為信の著作と言えは、第一節でも述べた通り、『身の鏡』、『理非鑑』、『古今軍理問答』、『闕疑兵庫記』の名が挙がる。それぞれ独立した作品ながら、そこに連続性が存在していたことは渡辺憲司氏や奥井康方氏が指摘されるところであり、下坂憲子氏はその指摘に関連させて、これら四作品の刊行を通じて、はじめは匿名としていた為信が徐々に実名、素性を明かしていく過程が辿れ、それが仕官を狙ったことであったと論じられる。事実、刊行と

前後して仕官が実現しており、だとすると、先の四作品は自らを売り込むための内容、つまりは自身の学識を披露しつつも、同時に世のニーズに応えるべく配慮した内容であった可能性が高い。要は純粋な学の追求だけでなく、俗な思いも含まれていたということである。

この点について、『古今軍理問答』から確認しておきたい。七卷七十三章から成る同書は、その凡例において『保元物語』、『平治物語』、『平家物語』、『太平記』、『甲陽軍鑑』に記される合戦内から「けやけきもの」を記したと説明する。この全七十三章のうち、卷三の十章、卷四の十一章、卷五の十一章、卷六の八章が『太平記』由来の話で、作品全体の約半数を占めることになり、『太平記』への注目の高さが認められるわけだが、<sup>(26)</sup>『太平記』から派生して評判書や注釈書が作られていく近世期の事情を踏まえれば、為信もまさにその流れに乗ったということだろう。が、大量にテクストが生まれる時代にあつては、その中で特出した何かがなければ仕官には結び付かない。この点に関しては奥井氏の論が実に示唆的で、『古今軍理問答』は先行作品、中でも『理尽鈔』との差異を強調していて、軍記に見えない逸話まで扱った『理尽鈔』のスタイルを否定してあくまでも軍記本文を対象とした考察を試みているなど、相当の対抗意識が見えるとのことである。<sup>(27)</sup> それこそ為信には『理尽鈔』を踏み台にして自身の作品の価値を高める意識もあつたのではないか。

併せて江本裕氏は、仮名草子作者には仕官など自身の社会面での希望が叶えば述作を辞め、文芸活動は俳諧のみに限定するケ―

スが間々見られるとし、それを「浪人の一過性」と評され<sup>(28)</sup>、その論を承ける形で下坂氏は「仕官以後の文芸的転換を、武士の余技と評価し、作家江島為信の喪失と見るのは妥当である。確かにその後為信に作家として生きる意思はなかつたであろう」と述べられる。<sup>(29)</sup> 事実、俳諧を除き、仕官後に発表された作品は為信にはない。そういった為信の実態を重ねるならば、仕官が成つてかなりの時を経た上で手がけることになつた本縁起では、世間一般に向けて己の主義主張をアピールする類いのものにする必要はなかつたということになる。

『古今軍理問答』に立ち戻ると、その半分が『太平記』関連で占めていることもあり、義助も登場しはする。確かに『縁起』にもあつた義助の見せ場となる「二度の懸」の話に関しては共有されるものの、基本的には義貞に伴つて登場する形が多く、それは義助を重視していたというのとは異なる。実際、義助の四国入り、その死への言及はなく、そもそも取り上げられる回数が義貞や正成などに比して少ないのだ。『理尽鈔』に対抗する思いを持ち、そして自身の仕官に結び付くような内容を求める上では、正成らを取り上げられることが主となるのは当然であつて、義助がそこまでクローズアップされないのも何ら不思議ではない。

また、漢籍引用に関しては、『古今軍理問答』においても大量に漢籍が用いられており、その多くは先に触れた通り、『孫子』などの兵書が多いのだが、『縁起』と違って出典を明記していることが多い。原拠を辿れるようにとの配慮かと思われるが、そういう手法は『縁起』では取られていないのである。その上、

『古今軍理問答』で使用したのとは異なる中国故事を本縁起が引用しているというのも、為信が意図的にそういう使い分けをしたと考えるべきではないだろうか。

こういった取り組み方ができたのは、仕官に向けての活動から解放されたところで書いたことが大きかったに違いない。作家業を離れてかなりの年数が経過してからの文筆、結果的には晩年にさしかかっている仕事である。確かに自身の学識を活用し、先行作品とはまた異なるものを提供するという点では、彼の高度な漢学の知識は窺えるものの、そこに辞典を明記するなどしてその知識を直接的にアピールする姿勢は見られない。それは『縁起』をそれ単体で読める、理解できるものを作成しようとしていたということではないだろうか。あくまでも為信が地元の英雄、義助を、自身の得意分野であった漢籍、そして『太平記』を利用して作成したものののだ。すなわち、往年の作家が地方役人の立場から、地元の英雄を称揚するために筆を揮う――、それが本縁起の本質だったのである。

### おわりに

『国府叢書』には寛文九（二六六九）年に国分寺住職快政、今治藩士町野弾右衛門、首藤又右衛門が発起人となって藩の許可を得て義助の碑を再建したとの記載がある。またその後には「江島長左衛門為信、外数輩詩文書多ク奉納セリ」ともあるから、<sup>(30)</sup> 為信だけでなく、今治藩に関わる多くの者にとって義助は自分たちの土地に纏わる大切な存在だったのだろう。この時再建した碑が、

その数年後の元禄二（一七〇三）年にはまたもや荒れ果てて、そこで今度は為信が再建を試み、『縁起』を記したといったことだろうか。ともかくも寛文九年の件があったからこそ、この縁起が後に生まれることになるのであって、つまりこの『縁起』は、作家としてではなく、今治の藩政に携わる立場にあったからこそ書くことができたものだったと結論付けられるのである。

今回取り上げた作品は非常に小さな作品である。しかし、全国規模で展開される『太平記』享受とは別に、第一節で言及した『蕨長寺縁起』しかり、本縁起しかり、地方小国の単位でも『太平記』は享受され、それを支える学問が存在する。『太平記』、もしくは学問の実態把握を志す上では、こういった小さい単位にも目を向け考察していく必要があるに違いない。

### 〈使用テキスト一覧〉

『脇屋義助卿縁起』↓愛媛大学図書館ホームページ画像。尚、引用に当たっては適宜送り仮名を付け足した。／『蕨長寺縁起』↓瀬戸内寺社縁起集（広島中世文芸研究会）／『太平記』↓日本古典文学大系／『史記』・『孫子』・『呉子』・『春秋左氏伝』・『戦国策』・『孟子』・『書経』・『唐詩選』・『莊子』↓新釈漢文大系／『古今軍理問答』・『理非鑑』・『闕疑兵庫記』↓『今治郷土史』第七卷／『身の鏡』↓新日本古典文学大系（『仮名草子集』）／『国府叢書』↓『今治郷土史』第四卷

注（一） 愛媛大学図書館ホームページ（<http://www.lib.ehime-u.ac.jp/EJIMA.html/01/wak/wak.htm>）参照。

（二） 注（一）と同。愛媛大学図書館ホームページの江嶋文書の項に拠る。

（三） 『太平記秘伝理尽鈔1』（東洋文庫、平凡社、二〇〇二・十二）の

加美宏氏の解説では、恩地左近太郎や矢尾別当顕幸、杉本左兵衛(泣男)といった『太平記』には登場せず「理尽鈔」で登場する人物が、「近世の多くの実録・読み物・絵本・小説・演劇・川柳など」にしばしば登場して重要な役割を果たして「おり、同書が「広く流布し、大きな影響を及ぼした」とする。尚、恩地左近についてはこの後触れる。

(4) 今井氏に『太平記評判秘伝理尽鈔』研究(汲古書院 二〇一二年)、加美氏に『太平記享受史論考』(桜楓社 一九八五・五)、『太平記の受谷と変谷』(翰林書房 一九九七・二)などの論考がある。

(5) 為信の経歴については下坂憲子氏が考察されるところで、「江嶋為信の仕官事情とその背景―寄託資料「江嶋家文書」報告を通して―」(愛媛国文と教育 36 二〇〇三・十二)、「漂泊野人」江嶋為信の文学と仕官(江戸文学 31 二〇〇四・十一)などの論がある。また、氏に先立って松田修氏の研究もある(「日州漂泊野人の生涯」国語国文 21 6 一九五二・六 ↓ 『日本近世文学の成立―異端の系譜―』法政大学出版局 一九六三・十一)。

(6) 松田氏の論(注(5))に拠れば、この異例とも言える出世の背景には定房の孫に当たる定陳(一六六七―一七〇二)の好学があったようである。

(7) その体裁故に、本テキストを「縁起」として扱うべきか否かが問題となってきた過去がある。中井香信『歯長寺縁起概説(歯長寺保存会 一九三六・八)、和田茂樹『歯長寺縁起解説』(瀬戸内寺社縁起集)広島中世文芸研究会 一九六七・四)、秦四郎『歯長寺縁起に落丁あること』(伊予史談 108 一九七二・十一)、近藤孝純『国重文「歯長寺縁起」に寄せる二、三の疑義』(伊予史談 249 一九八三・四)等参照。

(8) 拙著『室町の学問と知の継承 移行期における正統への志向』(勉誠出版 二〇一七・十一)、「等妙寺・歯長寺の本末関係と縁起―等妙寺縁起・「歯長寺縁起」における相互補充の可能性―」(平成二

十八年度 愛媛大学法文学部 人文学講座研究推進経費事業成果共同研究プロジェクト報告書「愛媛の文学芸能に関する文化誌研究―地域の言語文化資源の位相と展開―」(二〇一七・三)参照。

(9) 尚、この問題は地方における『太平記』享受という問題だけではなく、学問・注釈といった、より大きな観点からも扱っていくべきと筆者は考える。中世、中でも室町期は、五山僧や公家学者らの活躍によって学問が急速に発達した時代で、頻繁に講義が行われ、数多の抄物・注釈書が作成されたが、そこではよく東西の学問圏での学説の違い、対立というものが指摘される。帝将軍、公家対武家、京対鎌倉(東国)、中央対地方といった二項対立の図式は政治的・社会的事情も相俟って中世以降、際立ってくるのであって、それが学問にも反映されたということである。御成敗式目注釈がその典型的事例として挙げられよう。この点については、新田一郎氏の論などがあり(『虚言仰せラル、神』(『列島の文化史 6』日本エディターズ・グループ出版部 一九八九・九)、筆者も拙著(注(8))にて論じている。

ただし、とかく東西、京対鎌倉といった対立がイメージされがちではあるが、それこそ都に対しての「地方」は全国各地に点在するのであって、それぞれが都に対峙するところの自身の土地の位置付けに尽力しているように思われる。その意識のもとに地方の学問が発展していくのではないかとの見通しを筆者は持つており、中世から近世にかけての学問事情を明らかにする上では、今後は地方という存在にも目を向けていく必要があると考える。そういった観点から本縁起の検討は重要となるのだが、本稿ではひとまず『太平記』享受の問題として論じておきたい。

(10) 本縁起は愛媛大学図書館ホームページ内での江嶋文書紹介ページにおいて、画像とともに翻刻・書き下し文・現代語訳とが掲載されている。原本の文字の配置から判断するに、同縁起は六つのトピックで構成されているようで、書き下し文・現代語訳でもそれに合わせて六項目に分けて記される。本稿では①～⑤まではその区切り

そのまま従い、⑥のみ私に二分割して七章構成として扱おうこととする。

(11) 漢詩、署名も含めてである。尚、一行あたりの字数は十七〜二十二字程度となっている。

(12) 新田だけでなく、楠木についても好イメージで書かれる。④の漆川川戦での敗死に至る過程を、「正成竊<sub>ニ</sub>謂<sub>ニ</sub>當時<sub>ニ</sub>、官女領<sub>ニ</sub>郡國<sub>ニ</sub>、忠士漏<sub>テ</sub>恩澤<sub>ニ</sub>、設<sub>テ</sub>崔羅<sub>ニ</sub>於<sub>ニ</sub>武門<sub>ニ</sub>、飾<sub>ル</sub>兎齋<sub>ニ</sub>於<sub>ニ</sub>僧坊<sub>ニ</sub>、且<sub>ニ</sub>武將義貞<sub>ニ</sub>、有<sub>テ</sub>内顧<sub>ニ</sub>倦<sub>ニ</sub>軍務<sub>ニ</sub>、正成歎<sub>テ</sub>而諫<sub>ル</sub>レトモ不<sub>レ</sub>容<sub>ラ</sub>、察<sub>テ</sub>王法不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>改<sub>ス</sub>、版<sub>レ</sub>一<sub>ニ</sub>於<sub>ニ</sub>漆川<sub>ニ</sub>致<sub>ニ</sub>死<sub>ニ</sub>也」として、政道に不満を抱き、諫めもするが、それが受け入れられなかったとしても、それで見切りをつけることなく、最後まで従うといった忠臣の面が強調される。近世の儒学者に南朝正統論者が多いことと連動した問題か。

(13) ただし、該当箇所を引用するに、「賢者得<sub>ニ</sub>位<sub>ニ</sub>、猶<sub>ニ</sub>竜<sub>ニ</sub>得<sub>ニ</sub>水<sub>ニ</sub>、騰<sub>ニ</sub>地<sub>ニ</sub>游<sub>ニ</sub>霧<sub>ニ</sub>也」(『塩鉄論』)、「虎負<sub>ニ</sub>嶋<sub>ニ</sub>」(『孟子』)とあって、『太平記』の表現と完全に一致するわけではない。典拠の妥当性についても改めて検討する必要があるのかもしれない。

(14) 卷三「赤坂城軍事」でも「正成ハ元來策ヲ帷幄ノ中ニ運シ、勝事ヲ千里ノ外ニ決セント、陳平・張良ガ肺腑ノ間ヨリ流出セルガ如ク者ナリケレバ」と、陳平と張良を対にして取り上げている。

(15) たとえば『史記抄』などを見ても、二人を重視する積極的理由は見出し得ない。

(16) 『太平記』の漢籍利用については増田欣氏の『『太平記』の比較文学的研究』(角川書店 一九七六・三)に詳しい。また筆者も『三国志享受史論考』(汲古書院 二〇〇七・一)にて三国志を中心に『太平記』の漢籍享受について論じた。

(17) ただし、その人物像に揺れがあることから別人とする見解もあるようである。

(18) 「曹沫像の変遷―賢人から刺客へ―」(国士館人文学 47 二〇一五・三)。氏は、①『左伝』、『国語』、②『管子』、『呂氏春秋』、③『公羊伝』、『穀梁伝』、『新序』、④『淮南子』、『鶡冠子』、⑤『戦国策』、

⑥『孫子』、⑦上博楚簡「曹沫之陳」、『慎子』とに分類して、それぞれのテクストにおける曹沫の像を個々に確認した上で、その像の時代による変遷をまとめられる。

(19) 併せて『理尽鈔』における兵法の関心の強さや『孫子』・『呉子』を多用する姿勢が影響を及ぼしている可能性も視野に入れておくべきであろう。ただし、『理尽鈔』は新田を全面的に肯定しているわけではないので文脈としては重なり得ないし、また為信自身、『理尽鈔』の叙述姿勢に賛同しているわけではないとそうである。

(20) 「諺所謂、輔車相依、唇亡齒寒者、其虞、魏之謂也」とある。この他、哀公八年にも確認できる(「夫魯、齊・晋之臂、臂亡齒寒、君所知也」)。

(21) 縁起内の「崔」(輩の密生地)は意味としては「叢」に通ずる。

(22) 『史記』五帝紀に拠る。

(23) こういった漢籍由来の語は、他にも見える。②「難兄難弟出類拔萃<sub>ニ</sub>之勲績<sub>ニ</sub>、圖<sub>ニ</sub>於<sub>ニ</sub>麟閣<sub>ニ</sub>書<sub>テ</sub>於<sub>ニ</sub>雲臺<sub>ニ</sub>亦豈<sub>ニ</sub>差<sub>ニ</sub>乎<sub>ニ</sub>」とあるのは、宣帝が股肱の臣を思つて功臣を図画させた麒麟閣十一臣、永平年間に明帝が前代の功臣たちに感じて洛陽南宮の雲台に二十八将の肖像画を描かせたものとのことで、そのような忠臣に比しても劣らない新田兄弟の忠義を物語っているのである。また、単語単位の事例で言うならば、⑤「風旆<sub>ノ</sub>所<sub>ニ</sub>及<sub>ニ</sub>如<sub>ニ</sub>卷<sub>ニ</sub>沙<sub>ニ</sub>也」は唐の詩人、武元衡の「嘉陵驛」に「悠々風旆<sub>ノ</sub>逸<sub>ニ</sub>山川<sub>ニ</sub>」(『唐詩選』)とあり、⑥の「無<sub>ニ</sub>北征<sub>ニ</sub>無<sub>ニ</sub>功<sub>ニ</sub>之<sub>ニ</sub>勲<sub>ニ</sub>」の「無功」は、『莊子』内篇逍遙遊第一に「至人無<sub>ニ</sub>功<sub>ニ</sub>、神人無<sub>ニ</sub>功<sub>ニ</sub>、聖人無<sub>ニ</sub>名<sub>ニ</sub>」とある。直接の典故とまでは言えないまでも、為信の知識としていかに多くの漢籍がインプットされていたかの証拠となる。これらに関しても、『太平記』の該当するくだりでは使われていない。

(24) 渡辺氏の『身の鏡 理非鏡』(近世文学資料類従仮名草子編25 勉誠社 一九七七・六)解題、奥井氏の「江島為信「理非鏡」の位置」(『鯉城往來』6 二〇〇三・十二)を参照。

(25) 注(5)下坂氏二つ目の論。

(26) ちなみに『身の鏡』、『理非鑑』では軍記に関連する話はそこまで多いわけではなく、『太平記』に関連する話は、『身の鏡』「人は情の事」内に取り上げられた新田と小山田太郎の話しかない。『太平記』卷十六「新田殿湊河合戦事」、「小山田太郎高家刈青麦事」に相当。軍書と仮名草子との違いということだろう。

(27) 「江島為信の儒学と兵学―『古今軍理問答』の「理」―」(国文学攷180 二〇〇三・十二)、「江島為信『古今軍理問答』と『太平記評判秘伝理尽鈔』―楠正成の評価をめぐって―」(国文学攷190 二〇〇六・六) 参照。

(28) 『近世前期小説の研究』(若草書房 二〇〇〇・六)。

(29) 注(5)下坂氏二つ目の論。尚、これに続き、新興結社「夕方」で活動していたことに触れ、「幕政の根幹に携わりながらも抗いきれなかった為信の知的好奇心の現われ」とされるが、『縁起』の執筆もそれに近い現象と言えるかもしれない。

(30) これがいつの時点でのことを記したものかはつきりしない。補記の意味合いで、後に成立する『縁起』のことを書き留めた可能性も否定できないが、ここでは別に作成していたものとして話を進めておきたい。

(付記) 本研究は科研費(16K02368)の助成を受けたものである。